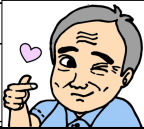


学習内容：昔と今 暦 尺度 言葉あそび

「竹取物語」その2の1

氏名



――竹取物語 その2――

翁はこの子を家に連れて帰り、大切に育てました。すると不思議なことに、翁はしばしば竹の中に黄金を見つけるようになり、しだいに豊かになりました。

このち①ご、養②ふほどに、すすくと大きくなりました。

三月③ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬ④れば、

髪⑤上げなどかくして髪上げさせ、裳⑥着す。

この子は輝くばかりに美しく成長し、「なよ竹のかぐや姫」と名づけられました。かぐや姫には多くの男性が求婚してきました。特に熱心だった五人の貴族の若者の一人一人に、かぐや姫は結婚の条件を提示しました。それは「蓬菜の玉の枝」「火鼠の皮衣」「竜の首の玉」などの、この世に存在するかどうかわからない伝説上の品々を持つてくるという難題で、誰も果たすことができませんでした。

その後、帝からも求婚されましたが、かぐや姫は応じませんでした。それから三年ほどたった年の春頃からかぐや姫はもの思いにふけるようになり、月を見て泣くことが多くなりました。翁がその理由を尋ねると、姫は「私は月の都の者なのです。八月十五日には迎えが来て、月の都へ帰らなければなりません」と答えました。翁からそのことを聞いた帝は、二千人の兵士を遣わして家を守り固めました。やがて、夜中の十二時頃、辺りが昼間よりも明るくなり、大空から雲に乗って、天人たちが降りてきました。

大空より、人、雲に乗りて下り来て、

土より五尺ばかり上がりたるほどに立ち連ねたり。

これを見て、内外なる人の心ども、

ものにおそはるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。

▽ち①ごとは

▽髪②上げとは

▽かぐや姫が五人の貴族の若者（貴公子）に提示した結婚の条件すなわち難題とは何か、資料集やワークから調べてみよう。

貴公子	難題の品	成否	このことから生まれた言葉
石作の皇子			
くらもちの皇子			
右大臣阿倍御主人			
大納言 大伴 御行			
中納言 石上 磨足			

※言葉遊び（言葉の由来をかもしている）とされる

▽八月十五日とは何なのだろうか。

▽五尺とは、どの程度の高さなのか。

▽内外なる（家の内や外にいる）

「家の中にいる人であっても外にいる人はもちろん」あたりの意味かー内外問わず

国語学習プリント

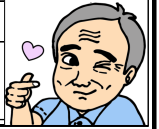
古典

date : 年 月 日

学習内容 : 言葉あそび(いわれ) + α

「竹取物語」その2の2

氏名



人々が、なすすべもなく、ぼんやりと見守っていると、天人は翁を呼び出し、「姫は天上で罪を犯したので、しばらくけがれた地上にいることになったのだ。今はその罪も消えたので、呼び戻すことになった。」と伝えました。天の羽衣を着せて少しでも早く月の世界へ連れ戻そうとする天人を制し、かぐや姫は泣き悲しむ翁たちに別れを告げました。そして、帝に宛てた手紙と不死の薬を帝の臣下に渡し、天人の言葉に従います。

① ふと ② 天の羽衣うち着せたてまつりつれば、

翁を、「いとほし、かなし。」と思しつることも失せぬ。

この衣着つる人は、もの思ひなくなりにつれば、

車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。

帝は、かぐや姫から不死の薬を贈られていたが、かぐや姫のいないこの世にいつまでもとどまる気がしない。そこで、「どの山が天に近いか。」とお尋ねになるとある人が、駿河の国にある山が、都からも近く天にも近いとお返事申しあげたので、その山に使者をお遣わしになった。

御文、不死の薬の壺並べて、

火をつけて燃やすべきよし 仰せたまふ。

そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して

山へ登りけるよりなむ、その山を「ふじの山」とは名づけける。

① その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ言ひ伝へたる。

▽ ふと Ⅱ さつと

▽ 天の羽衣とは何なのだろう。またその効果とは？

▽ いとほし、かなし

いとほし Ⅱ 気の毒だ。かわいそうだ。
かなし Ⅱ ふびんだ。かわいそうだ。

教科書では「気の毒だ、いたわしい。」と訳している。
※いたわしい Ⅱ ふびんだ。かわいそうだ。

▽ 具し：「具す」の連用形 具す Ⅱ 引き連れる

▽ ぬ：「完了」の助動詞 Ⅱ した

▽ よし：「理由。いわれ。わけ。手段。方法。手だて。事情。いきさつ。」

などいろいろな意味として使われる語。この場合は、
心持ち(お考え)ぐらいに考えるとよいだろう。

▽ 仰せ Ⅱ おっしゃる 命じる

▽ たまふ Ⅱ お…になる。

▽ うけたまはり Ⅱ ご承諾申し上げ

▽ あまたの意味とは？

▽ 「ふじの山」という名前の由来とは？

▽ その煙、いまだ雲の中へ立ち上る からわかる事象とは？

◆【その他の言葉遊び(先生案)】 かぐや姫の名付け親は御室戸斎部(みむろどういむべ)の秋田(あき)たてであり、その理由を「なまたけのごとくしなやかで輝くような美しさ」であったためとしている。つまり、かぐや姫Ⅱかぐや姫。このころの人々は普通に「かぐや姫」と聞けば、かぐはし(においたつぽと美しい)姫であると思ふことを逆手にとって、視覚効果を付加したいというの美しさをかもしだそうとしたのかなと思ふ。